

笑ってセックスして夢見るしかない一九九三年のキューバでかつて電話が世界で初めて発明されていたことを証明しようとする、そんな小説

カルラ・スアレス著／久野量一訳

『ハバナ零年』

共和国 二〇一九年二月

この小説の作者は、キューバ出身のスペイン語作家カルラ・スアレスという女性で、巻末の紹介によれば、一九六九年にハバナで生まれた彼女は、一九九八年からヨーロッパに渡り、現在はリスボン在住。彼女の小説が日本語に訳され日本語読者に紹介されるのはこれが初めてのことだという。訳者のあとがきによれば、原作のスペイン語版は二〇一〇年から一年頃に完成したものの、最初に出版されたのは二〇一一年のポルトガル語訳、次いで二〇一二年のフランス語訳で、このフランス語訳で二つの文学賞を受賞しているが、キューバでスペイン語の原作が出版されたのは二〇一六年のことだった。原作出版の二年後、二〇一八年末には日本で翻訳出版されているのだから、ヨーロッパ語圏以外では、いち早い紹介となるだろう。ちなみに、この日本語訳が出た後の二〇一九年にも、彼女はフリオ・コルタサル・イベロアメリカ文学賞なる賞を受賞している。小説の舞台は、作者の故郷キューバの首都ハバナで、時代は一九九三年。八九年にベルリンの壁が倒れ、九一年にソ連が崩壊して、社会主義国家建設の壮大な実験が失敗し、東西冷戦の

時代が終わりを告げ、「それまで社会主義ブロックの支援に支えられていたキューバ経済は急降下、すべてをなぎ倒していった」。そのどん底の年が一九九三年、小説冒頭にあるように「何もなかった。移動手段ゼロ。肉ゼロ。希望ゼロ」の「キューバのゼロ年」、小説題名にあるように「ハバナ零年」と形容されている年だ。

主人公はジュリアという名の三十歳の女性で、高専の数学教師。かつては通勤の不便さに不満を抱きながらもハバナ工科大学に勤めていたが、ある日トイレで女子学生たちが、彼女の性格が悪いのはセックスをしていないからだ、とうわさしているのを耳にしてあつさり辞めてしまう。そんな程度の理由で簡単に大学の職を辞められるのも、「一九九三年には大学を出たりエンジニアであつたりすることは長所であり誇りだったけれど、九三年以降はドル払いの店やガソリンスタンドの店員がそくなつた」というほどに、キューバ経済が立ち行かず、金のある方へと人々はなびき、以前の価値は崩れていつていたからだ。「何時間も電気がない。食べ物もわずか。来る日も来る日も豆ご飯。そして大豆。大豆の煮込み。豆乳。(……)パンは一人あたり一日一個。悪夢。」という困窮した日常生活の中、電話もろくに通じない当時のハバナで、しかも自分の家には電話がなく二階の家の電話を使わせてもらうしかない彼女だが、皮肉なこと、電話機が実はハバナで最初に発明されていたという情報を聞き、その歴史的事実を証明する文書を見つけ出すことに希望を見出し、周囲の者たちと共に奮闘する。それが、この小説の端緒である。



電話の発明といえ、場所はアメリカで、発明者はベルか、そうでなければ、幼い頃に読んだマンガ偉人伝のベルのところで紹介されていたベルより数時間遅れて特許申請をした人物か、あるいは発明王のエジソンも関わっていただろうか、というくらいしか私には恥ずかしながら思い浮かばなかったが、この小説によれば、最初の発明はそのいずれの者でもなく、メウツチというイタリア人だという。彼が十九世紀にイタリアからキューバに渡ってきて、アメリカではなく、ハバナで電話機を発明したのだということだ。それは一八四九年のことで、ベルが特許申請した一八七六年より三十年近く前になる。ただ、メウツチには特許を更新するための十ドルが支払えなかったため、最初の発明者とはなりえず、歴史に名を残せなかったという。このメウツチの話は、小説内のフィクションではなく史実のようだ。小説では、「二〇〇二年六月十一日(…)アメリカ合衆国議会は二六九号決議において、アントニオ・メウツチを電話の発明者とすることを公式に認めたのである」とも記されている(ただし、アメリカ議会が本当に公式に認めたかは、もう少し詳しく検討する必要があるようだ)。

メウツチの不運としかいえないような人生、それから電話以外の数々の発明なども、小説では章を

追うごとに、ジュリアと登場人物たちのやり取りの中で、上手い具体に配分され、少しずつ紹介されていく。かりに本書が、メウツチの数奇な人生と彼による最初の電話機の発明の紹介のみだったとしても、それはそれで今まで知らなかった人物の伝記として面白いだろうが、それ以上にこの小説が最後まで読者の興味を持続させるのは、ひとつには、メウツチの伝記話を小出しに挿しはさみつつ展開する、彼の文書を探し求める登場人物たちの錯綜した人間関係があるからだ。本小説では、メウツチの人生を記したのみの少年少女向けの伝記物ならばあつてはならない、不道德な、人間的魅力をもってキューバ人の登場人物たちが描かれている。何もかもがゼロのキューバにあつて、人々は、「疲れないことといえば、笑うこととセックスすることと夢を見ることしかなかった。だからこの国では笑い、セックスをし、夢を見る」という。「不道德な」と言ったのは、この中の「セックス」、不貞なセックスを指す。ユークリッドはジュリアが教わっていた大学の先生で、妻子もありながらジュリアと関係を持って家庭を壊した過去を持つ。ジュリアのボーイフレンドのエンジェルは、一まわりも二まわりも小さなブラジャーをつけて胸が飛び出しそうなイタリア女のバルバラと浮気をする。メウツチに関する小説を執筆中の作家のレオナルドは、エンジェルに浮気されて傷心中のジュリアと一夜を共にする。その口説きの場面はこうだ。レオナルドは、「キューバ人最大の欠点は新しい肉体に目がないこと」で、「それが国民的な欠点」なのだ」とジュリアに語る。二人がいい雰囲気になつてきた頃、「国民的な欠点って何だっけ」とジュリアが彼を見つめてあらためて聞き返すと、「レオナルドはわたしの口

の中に舌を入れ、それが答えだった。」と、もう不道德だとあきらめるどころか、いつの間にか、そんなしやれたまねをやつてみたいと羨望の念さえ読者に起こさせる。

数学教師のジュリアが「数字だつたら例えば自然数か整数か有理数か複素数か実数かで分類する」ように臆面もなく今まで出会った男性器を分類し、数列のように組み合わせ延々と列挙するくだりでは、教師の分際でありながら、その実、淫乱な尻軽売女のはしたなさに顔をしかめることもできるだろうし、また、多様な性愛の有り方が探求され肯定されなければならぬ昨今の世にあつてその性器至上主義の古典性を問題視することもできるかもしれない。しかし、そんなジュリアの「どうして愛つて少しも理性的じゃないのかしら？」というふしだらな甘美のつぶやきを聞かざらば、カオス理論やバタフライ効果、フラクタル理論といった科学的な話題に冷静な関心を装うことも忘れ、暑いハバナの熱い情事へと、いつ知れず読者は惹かれていく。ジュリアが語りかけている読者の「きみ」とは、きつとぼくだけのことに違いない。空想のハバナに強く吹きつける海風にシャツと妄想を膨らませながら「もう我慢できないのほうよ」と語りつてくれそうな気分になつてくる。ジュリアの皮膚に刻まれた歴史、すなわち彼女の下腹部の盲腸の手術跡に、エンジェルがやつたのと同じようにぼくもまた指と舌を這わせる。そうして、「混じり気のない純粹な悪臭」、「性欲さえも匂いを放つていて、それを誰も隠そうとしていない。人はあるがままにいて、だからあるがままに匂いを放つている」と言われるところの、キューバが放つ「本物」の匂いの中に溺れて

しまいたくもなつてくるのだ。

遙か遠く、北欧かどこかの幻の王国に果てしなき淫夢の憧憬を抱いていた中学生の頃のように、年甲斐もなくいささか興奮気味に語ってしまったが、読者をわくわくさせ、ページを最後まで進ませるのは、なにもこのような小説から発せられるゼ口年キューバの性的な魅力からのみではない。消えたメウツチ文書の所在を巡る謎と推理、そして、いくつも仕掛けられたどんでん返しをほうこそむしろ、この小説の醍醐味だし、作家の創作力を余すところなく発揮しているところだ、と本来ならば言わなければいけないところだろう。訳者も指摘しているように、この小説には推理小説的な要素もあるから、あまり詳しくは言えないが、登場人物たちの話には嘘も入り交じる。主人公のジュリアと同じ目線に立つて読んでいる私たち読者は、彼女と同じく他の登場人物たちの話を信じ、そして混乱もする。訳者もあとがきで触れている、作家レオナルドの話を少しだけ出すなら、彼はバルセロナにルワンダ、モスクワ、パリなど世界中を旅した話をジュリアに話して聞かせ、彼女は彼に魅了されてしまう。「あれほどの教養があつて、あちこち旅をして、数え切れないほどの経験があつて、世界を丸ごと呑み込もうという勢いのある勉強家、要するに彼のような人が移動手段に自転車しか持っていないことが、なんだかよくわからないけど変というか、人の普通の想像力をはるかに超えているような気がした」と。だが……小説終盤に分かる話をここで直接書くことは控えよう。ただ、ジュリアが上記の思いを彼に語った時の返答、「自転車は足の筋肉をつけるのに役に立っているし、それ以外のことなら全部頭の中に入っている」というレオナルドの

返答は、最後まで読み終わった後でもう一度読み返してみるならば、そういうことだったのかとあらためて頷ける表現になっている、作者の見事な仕掛けでもあったのだということに読者は気付くことになるだろう、ということだけは述べておきたい。

それから、本来のサイズよりも二つも下のブラジャーをつけてエンジェルのみならず私たち読者も誘惑するイタリア女のバルバラも、単なる脇役では収まらない人物だ。イタリア語話者なら、日本語話者よりもスペイン語の習得が遙かに容易なことは語学関連の仕事に就いている者ならなんとなく想像がつくとしても、しかし、イタリアからジャーナリストとしてやって来た彼女が、果たしてこれほどスムーズにスペイン語でキューバ人たちと会話できるものなのか。バルバラとその他の人物とのごく自然なスペイン語でのやり取りは、むしろ、小説のリアリティを破綻させてしまう失敗的なフィクション要素ではないか。本来なら小説内の虚構話のことなのだからどうでもいいようなことかもしれないが、職業柄か、ずつと心の片隅にひっかかる。そして終盤、このイタリア女が口にした故郷の諺のグアバのくだりで、私たち読者はジュリアと共に、あれっ? と一瞬立ち止まる。ここも詳述は控えるが、先の些細な懸念もきれいに晴れる仕掛けを作家は用意していたことに、読者は最後の最後になって気付かされ、驚かされるのだ。

話は変わって、私の専門であるベトナム文学研究の立場から思ったことも簡単に記しておきたい。このキューバ人女性作家のウィットに富んだ小説を読んで、同じ社会主義国のベトナム

にも似たような傾向がないかと考えると、一九九〇年代初めに現れた女性作家ファミ・ティ・ホアイ(一九六〇-)のことが私はまず思い浮かぶ。ホアイもベトナムを去って現在はドイツ在住で、彼女の作品は西欧諸語へと翻訳され、ヨーロッパでの文学賞も受賞している。ただ、残念なことにここ最近では創作を止めてしまっているのだが、スアレスがキューバで電話を最初に発明した人物を巡る話を電話もろくに通じない貧困を極めた時代を舞台に書いたように、かつてホアイも貧しさを分かち合っていた二十世紀後半のベトナムの人々の様子を皮肉なユーモアをもって描いていた。国外には容易に行けず、すべて読書と空想の中で旅したり、狭い住居の中で間仕切り一つ隔てて片方では少女が勉強しよう片方では母親が彼氏と情事にふけったり、なかなか出ない水道の水で苦労したり……この小説にも似たようなそんな場面が描かれていたりもする(ただし、もし捨て犬が貧しい時代のベトナムの小説に出ていたら、食文化の違いから、エトセトラのように飼われることなく、食用になっていたかもしれないが)。そんなホアイの作品もいつか本格的に紹介できればとも思う。

ただ、ベトナム文学を翻訳紹介する際、私がいつも思い起こすのは、以前参加した東南アジア文学のシンポジウムで提起された問題、つまり、東南アジアの文学作品の翻訳でしばしば見られる訳註の多さだ。地名や歴史、偉人、食べ物、草木、諺などの言い回し、あらゆるものに註釈が施される。もちろん、分りにくい言葉が丁寧に説明されているのは勉強になるし、文学作品を通じてその地域の文化や歴史を学ぶのに大いに役立つ。しかしながら、それによって作品そのものを読む楽しみが

削がれてしまうこともある。それに対し議論の中で、好対照として、訳註などなくても十分楽しめるという例に挙げられていたのが、ガルシア＝マルケスの作品をはじめとするラテンアメリカ文学だった。この『ハバナ零年』もその例に漏れない。訳註は最小限に抑えられ、ほとんどないに等しい。たとえば『グランマ』がキューバでどんな立ち位置にある新聞か分からずとも、パドウーラがどんなキューバ人作家で生没年がいつか分からなくても、この小説は楽しく読める。もし気になるなら、ネットで調べれば、今の時代、簡単に情報は見つけ出せる。「知らぬが仏」という日本語を見て、キューバに仏教が伝播していたのかと目くじら立てるような神経質な者もないだろうし、その原語表現が気になるとすれば、そんな読者はよっぽど特殊な専門業界の学者先生だけで、そんな人は自力で原語の表現を調べることができよう。キューバのことなど知らない読者であってもこの小説の世界に浸れるのは、原作の面白さ、巧みさに加えて、ここまで訳註を抑えつつ、自然な日本語で訳出した翻訳者、久野氏の苦勞、努力のゆえでもあったはずだ。このように訳註なしで紹介できる文学作品がベトナムにも今後数多く現れることを期待したいし、私もまた訳註なしでも楽しめる日本語訳に努めていきたい、といったことも考えさせられた。訳者はあとがきで、「新しいキューバ文学の扉が日本に開かれるとしたら、『ハバナ零年』こそかっこの入り口となる作品だと思つて翻訳した」と述べている。その言葉に間違いがないことを保証できるほどの知識も鑑識眼も持ち合わせているわけではない私ではあるが、この作家のこの作品を最初に日

本に翻訳・紹介した久野氏の炯眼に敬服するとともに、これから読む日本の読者には、大いに楽しめるキューバ現代文学として私も是非この作品を勧めたい。

附記

以上で書評を終わらせるべきところだが、自分自身の課題のためにも、もう一つだけ小説の内容とは少し話題が外れることでも述べておきたい。それは「電話」という語そのものに関してである。日本語における近代語彙の漢字意識では隠れてしまっているが、ヨーロッパ諸語ならばその響きや意味に残っている古代ギリシア語(あるいはラテン語)の起源が見えてくることがある。「電話」のスペイン語 *telefono* の場合、*tele* も *fono* も元を辿れば古代ギリシア語に行き着き、それぞれ「遠くの」、「声」を意味している。そして、これを無理矢理ハイデガー思想に関連付けるなら、ハイデガーは電話 *Telefon* / *telefono* ではなくテレビ *Fernsehen* / *television* を例に挙げてのことだが、こう述べている。「遠さのいかなる可能性も除去することの頂点をきわめているのが、遠望装置類としてのテレビ」(引用者注: 原語は *Fernschappatur*) です。「しかしながら」とハイデガーは続けて言う、「距離という距離をあわただしく除去したところで、近さは決して生じません。というのも、近きなるものは、わずかな分量の距離というのとは別物だからです」(「物」森一郎訳)。電話の発明によって、遠くの声は近くの声になったように私たちは思うし、その科学技術の利便性を今に至るまで享

受し続けている。しかし、ハイデガーは、それは本当の「近き」
なのではなく、近さも遠さも含めた距離の喪失、画一化なのだ、
と批判している。今回は時間がなかったが、そんな哲学的なこ
とについても、登場人物の名「エンジェル」の語源的な意味や
宗教的本義とも併せながらこの小説の中から考えてみるのも
面白いのではないかと思った次第である。

(野平宗弘)